東福院の公孫樹と毘沙門天

東福院の公孫樹は、天正初年（１５７３年頃）中興の僧、尊継師が現在の境内に植樹されたものと思われ、周囲５メートル余、高さ３０メートル余、樹齢４４０年余の古木で公孫樹の実が毎年なります。毎年、多くの葉と果実(銀杏)を付けますが、漏斗状の葉も見つかり、それらは「らっぱいちょう」と呼ばれています。

樹形が大変美しいことから県選定「かながわの名木１００選」に選ばれています。

天然記念物　東福院の公孫樹
（昭和４７年１０月３日町重要文化財指定）

東福院と毘沙門天

東福院は、真言宗の寺院で、稲荷山薬師寺東福院と号します。大永３（１５２３）年、地頭安藤源四郎の内庵として創建されました。また、北条家より虎の御朱印を賜ったことが古文書に記されています。

本寺院の伽藍の一角には、福徳開運毘沙門天王をお祀りし、夜の大祭として１月７日（古くは寅の日の寅の刻）の夕刻より福木を焚き、その火を受けると善男善女は１年中悪病を除き御利益を受けるとされています。大祭当日は、毘沙門天堂で大護摩祈願を受ける善男善女で大変賑わいを見せます。

らっぱいちょう

毘沙門堂の福徳開運毘沙門天王